



百人町教会

集会案内

礼拝：毎週日曜 午前10時30分
 於 東京家政専門学校2階
 聖書研究会：第1・3水曜 午後7時半
 於 Zoom
 連絡先：〒162-0066 東京都新宿区
 市谷台町14-1-701 賈晶淳 方
 TEL/FAX 03-6273-2930

http://www.hyakunincho-church.com
 郵便振替口座：00180-8-565379



私の目線(九五)

おもいで

阿蘇 旅人

賈先生とのエピソード
 僕が中学一年生の時に初めて韓国に行きました。蚕室中央教会との合同修養会でバスの後ろの席から日本語で話しかけられました。学生時代の賈先生です。

浜辺でテントを張りキャンプをした。ご飯、沢庵、イカをあぶってあまじょっぱくして鷹のつめをふったようなおかず、みそ汁。日本と変わらない内容で驚いた。夜、兵隊のM-16自動小銃の射撃の音、ラジオから日本の文化放送の番組が雑音交じりで聞こえた。物理的距離の近さを感じた。会話は砂や紙に漢字を書いて意思疎通していたが実際には英語で話す方が早く多くのことがわかった。

道子さんと僚のエピソード

僚が一歳半の時に次男が肺炎で入院をした。妻は次男の世話の為、病院に泊まり込みとなり、僕と僚はその間、実家にいることにした。

ある日、僚が散歩に行きたいと道子さんにお願いした。道子さんは道路を横断する時以外は抱っこしないことを条件に了承。

しかし、途中で僚は疲れてしまい抱っこを要求。道子さんは立ち止まり、向かい合い、先の話の繰り返しと一時間。僚は根負けし無事歩いて帰宅。それ以来、僚は道子さんと話をする時には背筋を伸ばし、敬語となりました。

敏文サンタと晃司のエピソード

次男晃司が二歳のクリスマスMASの時、阿蘇ジュニア家に敏文サンタがやって来た。「ハロー、デイスイズサンタ」と話しかけながら玄関から入ってきた。晃司は驚きと恐怖で目を剥き出し、顔を真っ赤にして大泣きを始めた。なだめようとサンタは晃司に近づき再度、英語で話しかけた。火に油を注ぐこととなった。その横で兄は腹を抱えて大笑いをしていた。

韓国と七海

長女七海が高校一年の時、賈先生が日韓青少年合同修養会に誘ってくださいました。

とても有意義な時間を過ごし、帰国後は韓国について調べてみたり、修養会を通しておじいちゃんのことをフォークラスしてみたりと今までは違った面が芽生えて来たように感じました。

最近の僕

仕事では生協の肉屋をやっています。魚屋↓本部↓店ときまして三年前から肉屋です。五十の手習いでございます。肉屋になってから七つの店を移動しました。神奈川の地理に詳しくなりました。お休みの日はペットの空と散歩するのが日課です。

龍ヶ崎の家(ASOハウス)は白戸さん夫婦が住んでいます。たまに菅谷さん、小屋さんが様子を見て来ています。今後、どうしていいか考える余裕が出てきた今日この頃です。

そういえば、五パーセント体重が落ちました。維持しています。

インマヌエル預言

イザヤ書七・一―一七

賈 晶淳

マタイによる福音書一章一八節以下にイエス・キリストの誕生の預言が記されています。中でも二三節のインマヌエル預言は私たちに馴染んでいる言葉です。

「見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。」この名は、「神は我々と共におられる」という意味である。

この聖句の前半部は本日の本文であるイザヤ書七章一四節の後半部と全く一緒で、待降節と聖誕節に最も知られている言葉の一つです。ただ、マタイの預言にはイエスの名が「インマヌエル」と呼ばれると記されています。ここでイザヤの預言との関連について考える前に関連するイエスの名について簡略に紹介しようと思います。まず、イエスの呼称であるキリストについてはご存じの方が多くと思いますが、他に幾つかある呼称のなかで最も大事な意味を持っていますので短く説明します。「救い主」を意味する「キリスト」はヘブライ語の「メシア」のギリシア語訳です。そして、メシアは「油注がれた者」という意味を持ち、選ばれ、権威と責任を与えられ、相応しい任務に就かせるため頭に油が注がれる

人のことです。古代イスラエルにおける王や祭司、そして預言者もそのような存在として認められていました。

イエスという名（マタイ一・二一）にも意味があります。この名は当時多くの人につけられた名前だったようです。親たちの多くが生まれる自分の子供に期待をもって名をつけるのは時を超えて変わらないことと思います。そして時代ごとに好まれる名があるのも同じでしょう。イエスの代わりに釈放されたバラバ・イエス（マタイ二七・一六他）がいます。少し違う形ですがヨシヤア記のヨシヤア、宗教改革を行なったヨシヤ王も同じ名前です。これらの名前の基本となるヨシヤアは、元はホシエアであったのをモーセがヨシヤアとしたのです（民一三の一六）。ヨシヤアの名前を復元しますと、ヨホシエア、或いは「イェホシエア」という名前ですが、ここで「ヨ」、或いは「イェ」は神の名のヤハウェを意味し、ホシエアは預言者ホセアの名と同じで意味は「救い」です。合わせますとヨシヤアという名は「神は救い」という意味であることが分かります。ということからヨシヤア、ヨシヤ、イエスは少し発音の違いはありますが時代を超えて人々に好かれた名前であることがよく分かります。

今日のテーマである「インマヌエル」の意味はイザヤ書八章一〇節とマタイ一章二三節に記されているように「神は我々と共におられる」です。聖書でこの名が登場するのは本日テキスト一四節が最初で、この預言の段落である九章六節までの間で、八章八節と一〇節の二回と、マタイと合わせ四回のみです。

このインマヌエルという言葉がキリスト教を超え多くの人々に認識されているのは、イエスの名であることにも起因しますが、同時に誤解からでもあるようです。つまりその意味において「我々」のところを「我」として認識することが多いためではないかと思えます。注意したいのはあくまでこの名の意味は我々という複数の信仰告白にあるということですから、共同体意識が前提とされていることです。勿論個の救いを否定するものではありません。ただ、生まれる子にこの名をつけることの意味は、現在における共同体の危機をのり越えたい期待感からだと思いますので、共同体意識の方がより大事ではないかと思えます。それではこのインマヌエル預言が登場する背景に何があったのかを本文を通してご一緒に考えてみたいと思います。この預言はイザヤを通しての神の計画と同時に、当時の王権批判であるということです。これらのことは

前八世紀と七世紀における裁きの預言者の特徴でもあります。この預言の段落で対象となる王は七章一節に出ているユダ王国の王アハズという人物です。そして、その時代の背景にはアッシリアの勢力拡大による脅威がありました。紀元前七三〇年前後に当たります。

その脅威に対抗する形で北イスラエル王国とアラムが同盟関係に入り、その誘いを断ったユダ王国を攻めるも失敗します（列王記下一六章）。しかし、アハズ王は神にも頼らない存在だったので、当時の預言者であったイザヤはこのアハズ王を批判し、彼に神の計画を告げているのがこの預言の内容です。即ち、神はアハズ王の治世を終わりにし、新しい指導者を与えるという意味です。そして、アハズ王の後継者として紀元前七一五年に油注がれる王は息子のヒゼキヤです。ヒゼキヤ王は神に従って善政を行ない、アッシリアによるイスラエル王国の滅び（前七二一年）の時にユダとエルサレムを守ります。このイザヤの預言の中で生まれる子が、新しい王となるヒゼキヤです。そのため当時のユダの人々はヒゼキヤ王に大いなるメシア的期待をかけていたことでしょうか。

そして、この線上で関連して考えたい人物があります。預言者エレミヤと上記しましたユ

ダのヨシヤ王です。イザヤとヒゼキヤから約一〇〇年後の時代になります。エレミヤはイザヤと共に大預言者の一人です。そしてヨシヤ王はヒゼキヤ王と肩を並べるユダ王国の重要な人物です。人々はこの二人に大いなる期待感を持ち、二人の王はダビデ王以来最もダビデ王に近い統治を行った人物として認められました。そしてもう一つ、イザヤ・ヒゼキヤの時代的背景と似ているのはエレミヤ・ヨシヤ時代も新バビロニアの勢力拡大の脅威にあつていたことです。勿論、ヨシヤ王もヒゼキヤ王のように新バビロニアの脅威をのり越えます。

こういうことから私見ではありますが、ヨシヤ時代におけるインマヌエル預言はありませんでしたが、あつたとしても不思議ではないということです。また続く古代イスラエルの歴史は、バビロニア捕囚期を経て、ペルシア、マケドニア、ローマという巨大な帝国の侵略と支配を繰り返し受けることとなり、常に存亡の危機に直面していて、当然人々は支配者が変わる度にメシアを、救い主を待望していたと思うのは間違いではないでしょう。イエスが生まれる当時の状況も同じだったと思います。人々は数々の混乱の中で個人だけでなく、共同体として救われたい、そのため

にダビデ王のような偉大なる存在が再び現れることを切に望んでいたと思います。

最後に、イザヤの預言で「インマヌエル」の名がつけられる人物にはどのような働きが期待されていたのかについてです。イザヤ書九章五節と六節です。

ひとりのみどりごがわたしたちのために生まれた。ひとりの男の子がわたしたちに与えられた。権威が彼の肩にある。その名は、「驚くべき指導者、力ある神、永遠の父、平和の君」と唱えられる。ダビデの王座とその王国に権威は増し、平和は絶えることがない。王国は正義と恵みの業によって、今もしてとこしえに、立てられ支えられる。万軍の主の熱意がこれを成し遂げる。

このインマヌエル預言には、神を拒否し、権威を失い、世界に分裂をもたらせる人物の代わりに、神が世界に直接関与し、新しい人物を立て、神の権威を与え、その上神も熱意をもってその計画に参加し、平和と正義と恵の業によって神の国を実現させるといことです。そして、危機の時代に人々はいつもの預言を思い出したと思います。今、私たちもこの預言が、今に相応しい形で実現されることを共に祈りたいと思います。

(二〇二二年一月一日証詞より)

第二回「未来委員会」報告

未来委員会幹事会

第一回未来委員会後の幹事会で「ろば」への報告だけでは皆さんとの情報共有が足りないのでは、未来委員会前後に開いてきた幹事会議事録をホームページに載せたらどうかという意見が出ました。そこで先日の幹事会に買先生にも参加して頂きホームページに載せることが可能かどうかをお聞きしました。その結果「未来委員会」という項目を作り、議事録閲覧希望者には教会のEメールで連絡してもらうことにしました。そして、その項目を五〇周年のアンケートや「ろば」掲載記事のアーカイブとすることにもしました。一〇月一六日の未来委員会二回目の話し合いの時実際にそれをZOOM画面上で確認しました。

○週報の集会参加者男女別記載について

総会で提案したこと（トランスジェンダーの人などに悩んでいる人たちは、男女の区別に触れてほしくないと思っっている人がいるので週報上の男女別を廃止してもよいのではないか）を再度経過報告しました。週報の集会参加者男女別記載は教団に報告する必要があるためですが、その折、時代の流れだからとすぐに変えるのではなく、私たちがもつとLGBTQのことを学び、理解を深めてから

でよいのではないかと賈先生から「LGBTとキリスト教」という本を紹介されました。

提案に対して、「男女別をなくすことにより、女性の社会進出を見えにくくする心配はある」「統計上男女の数は記録する必要がある」「これは数字より差別の問題であり、隠すよりみんなで認め合うことが重要」「嫌なら自分で言えばよいのではないか」等の意見に対し、「信頼関係があってもカミングアウトは簡単なことではない」「目に触れるところで男女別は不要、新しく来る人が性別で嫌な思いをしないようにしたい」「教会で性別の記載は必要ない」「百人町教会から教団に個人情報観点から問題提起をしてもよいのでは」等の意見も出ました。差別や人権について今後も考えていくことになりました。

○アンケートの続き「今後の教会について」

コロナ禍前にとったアンケートですが、高齢化の中で「少人数になっても百人町教会を続けたい」と思っっている人が多いです。また、凶らずもコロナ禍でネットやZOOMを用いて礼拝や集会を行うことができます。

一〇月の世話人会でコロナも少し減り一月はまだ換気もしやすいので、実験的に高田馬場の教会で対面礼拝をやってみようという提案が出ました。第一週世話人だけが高田馬

場の教会で対面礼拝を行い、他の会員の方々は自宅でZOOMで参加する。つまり、ハイブリッドの礼拝を初めて試してみるので。

それがうまくできれば、一二月第一週は教会員宅でハイブリッド礼拝を行う予定です。

話し合いでは「牧師がいるメインの集まりと同時に地域での集まりで共に礼拝ができれば」「ネットのできる集会、対面でなければできない集会の良し悪しが分かってきた」「公施設なども利用したいが讚美歌の問題がある」「家庭集会ではなく巡回礼拝など名称を考えた」「礼拝堂を持っていない百人町教会は自由にどこでも礼拝ができる。他の教会のモデルケースとなるのではないか」「デジタル格差の問題をどう乗り越えるか」等の意見が出ました。ハイブリッド礼拝は初めての経験でどうなるかは全く分かりません。ただ成功すれば、教会・地域どちらも回数を増やしていけるだろうと思います。

ともかく私たちは一歩前に進むことにしました。コロナ禍第八波という声にも耳を傾け、初めてのハイブリッド礼拝という形に取り組み、試行錯誤を重ねながらさらに工夫していこうとしています。

（礼拝参加者・二三名／発題・石田美智代・小島悦子／記録・小島悦子）

教会といやし

山崎 麻里子

イエス様の活動は言うに及ばず、それに続く使徒達の初代の教会は「いやし」を行うところでもあった、と聖書にはあります（使徒五・二二―一六他多数）。その様子は様々な奇跡譚として驚きと感動をもつていきいきと綴られています。現代では、病気や怪我を治療する役割は、教会ではなく医療機関が担う様になり、心のいやしさえも病院や診療所の仕事になりつつあります。もちろん、身体の問題ばかりではなく心の病もまずは、医学的な受診を行うべきです。しかし、キリスト教会には聖書にある様に、その最初期から、様々な重い病や障害に苦しむ人々が通って来ていたという事は驚くべきことです。彼らは当時の医師や医学から見離されやつの思いでイエス様や一二使徒や初代教会の許に集まって来たのです。自身の力で自然治癒する人や、近所の医者によって基本的に治るような病気や怪我の人は初めから、わざわざ、彼らの許には来なかった筈です。そして、現在もお、人ゆえの実存的な苦しみを抱える人達や、一方では、重い身体や心の病や障害に苦しむ、いやしと救済を求めて教会に通っておられる方々も数多くいます。

私が初めて百人町教会の礼拝に参加したのは、賈品淳牧師の主任牧師就任式（一九九七年一月）のちょうど一周間後のことでした。また、二〇一一年の東日本大震災の後、被災地仙台周辺でのボランティア活動のため、車での夜間移動の際に、杉並区の故阿蘇道子さん宅に立ち寄り、そこで聖書研究会に参加する機会を得、多くの方々との交わりや聖書やキリスト教の学びの機会を共にすることが出来ました。

その頃無職の主婦だった私は一念発起して介護の学校に通い、一三年四月には訪問介護ヘルパーの資格を得て、地元の高齢者介護の職に就き、訪問介護ヘルパーやデイサービス職員として働き始めました。やがて介護福祉士や公認心理師等の資格を取得し、高齢者介護に関する知識や経験を少しずつ蓄積して来ました。しかし、その間も、私の心はもう十年以上前にかつて被災地のボランティア活動の中でお世話になった人々に対して、いつかは恩返し出来ればよいと思いつつ来てました。私が公認心理師の資格を取得したと言いましたが、本来、私は人の話を聴くのがとても苦手な人です。これは必ずしも私だけではないと思います。教育心理学では一斉授業または座学による記憶の定着率は低く何と五パー

セント程度だそうです。それでも人は人の話を聴くことが出来ると思います。

ドイツの牧師であり神学者でもあったD・ボンヘッファーは「真剣に聴いてあげることだけで、しばしば、ひとが助けを与えられることを今日、異教の世界は知っている。この認識に立って、それは多数の人々、多数のキリスト教も、獲得する独自の霊の治療法をつくりあげたのである。しかし、キリスト者は、キリストから聴くことの職務が彼らに委任されていることを忘れてしまっている。」と言いました。聖書に拠れば初代教会は、人をいやす場でもあったそうです。教育現場には「チーム学校」と言う言葉があります、それは一人の児童・生徒・学生は学校の全スタッフで支えるべきだという考え方です。また、医療現場には「チーム病院」と言う言葉もあります。一人の患者さんは病院の全スタッフでサポートしようという考え方です。エルサレム神殿のソロモンの回廊でいやしを行った使徒ペトロにも他に一人の仲間がいた様に、いやしとは、あるいは「チーム教会」で行うものかも知れません。一人の信徒は教会の人達全員で支えるべきなのではないでしょうか。

（二〇二二年一月二〇日証詞より）

コロナ禍におけるフィリピン人移住者の窮状 アガリン 長瀬

カフィン移民センター(以下カフィン)は、国際結婚や働くために日本に滞在する在留外国人とその家族が深刻な生活上の問題に直面した時に緊急支援を提供しています。具体的活動内容は、法的支援、福祉援助、一時的な避難所、カウンセリング、教育と訓練の提供の他私たちがが向いて支援活動を行うこともあります。相談内容は、出入国管理政策、家庭内暴力、不当労働慣行に関連する問題です。

一・日本の現状

日本には一七〇万人以上の外国人労働者がおり、そのうち約一九万人がフィリピン人で、滞在資格は、長期滞在、永住、学生ビザ、技能実習生ビザです。

二〇一九年四月、日本は初めて、非熟練労働者に門戸を開きました。新制度の下で、最大三四万五千人のブルーカラー労働者が来日し、一四の部門で働くこと予測されています(ジヤパンタイムズ二〇一九年三月三十一日)。

深刻な人手不足に加えて、日本社会の抱えるもう一つの問題は少子高齢化であり、世界一の高齢化社会が到来します。レストラン、ホテル、レジャー、観光、建設などの産業に加え、医療部門、特に高齢者ケアの部門での

労働力不足が顕著です。高齢者ケアにおいては、介護に熟練した人だけでなく、日本語や日本文化にも精通した人材が必要ですがその確保は容易ではありません。今後大きな問題になることが予想されます。

二・コロナ禍での現状

在留外国人の就職斡旋サイトを運営するV O L O の調査によると在留外国人会員の八割近くが新型コロナウイルス感染拡大により解雇や収入減等仕事への影響があったと回答しています。解雇にいたった場合ビザは無効となり、新しい仕事に就く度に新たに就労ビザを取得する必要があります。ビザの更新は本国送還につながる可能性があり、母国へのフライトの減少や経済的苦境のために日本で不本意に拘留されている人もいます。

二年間の新型コロナウイルス蔓延により、女性移住労働者一般、特にフィリピン人女性が暮らしにおいて被った影響は以下のように要約できます。①営業時間の短縮と関連産業の縮小の影響による一方的な解雇、②労働時間の短縮、つまり給与の削減、家族への送金の削減、③国際的な移動制限のために仕事に復帰することができない、④新型コロナウイルスに感染したフィリピン人労働者は、大使館から適切な支援を受けていない。彼女たちを雇用する企

業も、十分な支援をしていない、⑤政府機関や企業は、それぞれの工場の感染状況について報告していないため、ほとんどの移住労働者は自助努力で対処する他なく、頼りにできるのは働く者同士の助け合いに限定される。

三・カフィンの対応

このような状況下においてカフィンは、電話カウンセリング、精神的支援、食費に充てる少額の金銭的支援を行うことで感染者を支えてきました。カフィンは、調査やインタビューを実施し、さまざまな草の根組織、技能実習生、利害関係者の間で相互協力のための話し合いを行っています。このような活動を通して、さまざまな産業における移住労働者の状況を明らかにし、日本で暮らす移住労働者が経験している現在の困難を軽減するための初期計画を策定することができました。

カフィンは多くの在留外国人の相談に乗り、地域での助け合い活動を行うことで移住労働者の抱える問題把握に努めています。また日本人と非日本人、地方組織、労働組合の連帯を築き、移民の権利と福祉に焦点を当てた地方自治体ユニット間のネットワークをつくり、移民組織とコミュニティを支援することで、問題に対処するための道筋をつける活動を展開しています。(要約翻訳・空閑 厚樹)

常隆さん訪問記

雨宮 道子

「小池常隆・佐枝子夫妻を訪問したいね」と新谷さんと話したのは、昨年の十二月だった。コロナ感染者が増え、訪問を延期していた。七月、常隆さんが階段から落ち入院。またまた延期。一〇月一二日やっと実現。この日が待ち遠しかった。

買牧師、小川ひとみさん、佐藤かよ子さん、新谷さんと私。玄関に現れた常隆さんは、ちよつとふつくらし、すくつと立ち、歩き、居間に案内してくれた。予想した以上の快復ぶり。常隆さんを囲んで五人が次々と質問をする。はじめは私たちの訪問に驚いていたが、表情が柔らかくなり、本来の常隆さんに戻り、よく語ってくれた。

佐枝子さんが施設に入り、ひとり暮らし。階段から落ち背中を強打し、うずくまっていたところをヘルパーさんが発見。背骨の圧迫骨折で一ヶ月入院。退院後もひとり暮らし。介護度一。ヘルパーさんが一日二回来てお世話してくれる。主に食事作り。「どんなものを作ってくれるのですか」「こちらが作ってほしいもの。買物をしてくれたり冷蔵庫の中を見て作ってくれる。ビールは毎日飲んでいいよ」（やっぱりね）私たちの訪問中にリハ

ビリをしてくれる方が来る。医療保険で三分治療。ベッドに横たわる常隆さんは気持ちよさそう。「退院してすぐは「痛い、痛い」と言っていたのですよ」と言われる。ヘルパーさんも来ていていねいに掃除して下さっていた。リハビリの方も掃除の方も週一回。

居間の大きな掛井さんの絵が目についた。米国にいた折り、掛井さんが小池家を訪問した時に描いてくれた人物画。その他にも掛井さんの絵や作品、さらに二〇一九年のお手紙。居間はあたたかい掛井さんの作品に囲まれている。掛井さんとは一四歳ちがいがい。出会ったのは常隆さん小学生、掛井さん二十代の若者。教会のグループでかわいがってもらった。大久保集会、百人町教会の初期のことを話してもらった。懐かしい名前が次々と出てくる。

居間には子ども達が常隆さんのために整えた音響機器やCDも。前中さんのCDもあった。「前中さんうまくなったなあ」と。

「おひるは外にしよう！」と買牧師。はじめは躊躇していたがいつの間にか立ち上がり車に乗り込む。買牧師の上手な運転でいい気分。海の見えるレストランへ。島や船が見える。「まずはビール！」スパイスリースパゲツティをペロリ。おみやげのお団子も二串。食欲ありで一安心。ここでも常隆さんの舌は滑

らか。大学時代にダンスサークルに入っていたこと。花を育てるのが趣味だったこと。見晴らしの良い屋上で以前は大きな植木鉢に花をいっぱい育てていた。「今は無理だなあ」と残念そう。

常隆さんは素敵な文章を書く人でもある。常隆さんが中心となつて「梟」という同人誌を発行していた。このところ「ろば」に笹淵さんと掛井さんを悼む文章を寄稿している。切々と常隆さんの悲しみが伝わってくる。

「先日、佐枝子の所に行つてきたよ。笑顔だった。ひと月に一回一五分の面会が出来る」とのこと。なんと川崎まで電車に乗って行つたと話す。



この家で笑顔の佐枝子さんと会えなかったのは残念だが、ひとりである姿に、私たちが力を与えられた一日だった。

図書紹介

『LGBTとキリスト教』

監修・平良 愛香

日本キリスト教団出版局

本書は、月刊誌『信徒の友』で連載されたシリーズに書き下ろしを加えたもので、LGBT当事者を中心とした二〇人の体験記とコラムで構成されている。

「LGBT」という言葉は、パートナーシップ制度に関する最近の報道などから広く認知されてきていると思うが、人々はこれをどのように解釈しているだろうか。私はこれまでもこの言葉の示す意味を、レズビアン、ゲイといった単語の頭文字をとって表現した性的少数者の総称と捉えていたが、その理解はぼんやりとしたものだった。本書の巻末には用語の解説があり、理解を深めることを助けてくれる。レズビアン、ゲイ、バイセクシュアルとは性的指向に関する言葉、トランスジェンダーとは性自認に関する言葉であるということ（言葉は複数の意味を示す場合もある）だが、本書での「LGBT」は「社会の中で生きづらさを感じ付けられている性的マイノリティ全体」を指している。

生まれ持った体の性と性自認が異なるとき、そして周囲の人の殆どはそのような状態ではないのだと知ったとき、多くのLGBT当事者は社会生活を営むには自分の状態を隠していかなければならないと考える。その一方で、自分自身に嘘をついていることの苦しさを感

じ続けている。またクリスチャンとしては、同性愛を否定的に描く聖書箇所にも、自分の存在を否定されていると思えば悩む人もいるという。二〇人の体験記では、一人ひとりが自分の状態をどのように認め、時には闘い、解放してきたかが描かれている。この体験記のひとつが、行政と福祉サービスの利用者という関係で私関わったTさんのものであった。

重度の脳性まひがあるTさんは、生物学的な性は男性、性自認は女性というトランスジェンダーだ。二次障害により生活の殆どに介助が必要となったとき、自分らしい生活を送るためにとカミングアウトするが、周囲の理解は得られず、家族には拒絶されてしまう。地元に住づらくなったTさんは、東京に出てきてヘルパー制度を使いながらの一人暮らしを始める。一六年後の現在のTさんは、自認する性として暮らし、ありのままを受け止めてくれる教会に出会い通っているとのことだ。

Tさんは、『ありのままの私』を受け入れてくださる神様の恵みは誰にでも注がれています」と言う。他の当事者の体験談にも「神はすべてをご覧になって『大変良い』と言われた。私たち全てを「良い」と言ってくださる神をこれからも信頼する」といった言葉があり、心が開かれる思いがした。本書は、彼らは私たちの周りにいるのだと知り、彼らを見えない存在としないことが大切であると、LGBT当事者の存在のありようから教えてくれる一冊である。

(坂 真理子)

ろばのせなか

クリスマスおめでとうございます。

ロシアの侵攻によるウクライナでの戦火が止みません。神が創造し「すべてよし」とされた地はそれを統べる者として創造された人間によりもはや見る影もない有様です。救い主であり平和の主であるイエス・キリスト誕生の日に「地には平和を」と切に祈ります。

お気づきでしょうか。本号からろばの題字が変わりました。この字体は故岡川誠二さんの筆によるものです。百人町教会の会報は一九七一年一月に一号を発行、七二年五月発行の二号から「ろば」と命名、岡川さんが題字を書きました。五号までこの題字を使いましたが、六号から掛井五郎さんの彫刻「ロバと弟子」を使用するようになり、題字が活字になりました。二〇二一年一月から始まった「ろばを読む会」を通し過去のろばを読む中で、賈先生が二、五号の題字に気づかれ、編集委員会で相談し再活用を決めました。やわらかい感じになりました。

岡川さんは一九七一年六月、当時大久保集会所と称し信徒だけで試行錯誤しながら歩んでいた草創期に仲間に加わりました。困難を抱えながら新しい出発を決意した岡川さんを教会は支えましたが、支えることにより教会も支えられました。共に支え合った草創期の思いを引き継ぎ、ろばはこれからも歩いていきます。皆様のご意見ご感想をお待ちします。

(小池 恵子)